

Finnegans Wake, 601.04—602.08 註解

福岡 眞知子

James Joyce (1882-1941) (以下、ジョイス) の *Finnegans Wake* (1939年刊)¹⁾ (以下、FW と略記) には、数々の聖人が登場する。St Patrick、St Brigid、St Colum Cille (Columba)、St John、St Francis Xavier など、枚挙にいとまがない²⁾。これら聖人たちは、多様でありながら、「聖人」という共通項を持つ。その共通であることが、FW ではたいへんだいじな意味を持つ。つまり、このひとつの共通点で、あの聖人もこの聖人も、「男性主人公」HCE と結び付けられるいわば権利を持ち、作中、HCE の多様な一形態として、そこそこに現れては、主人公 HCE の「人物造形」に「厚み」を加える。

いっぽう、これらの聖人にまつわる土地もまた、数々立ち現れる。生地、修行地、布教の地、旅行先、と関連する場所が見え隠れしては、聖人本体の存在を示唆する。

本稿³⁾では、特に St Kevin とその修行の地 Glendalough にまつわる601頁4行目から602頁8行目(本分野の慣例に従い、601.04-602.08と略記する)を取り上げ、註解を施す。

ここで基本的なものとされるのは、ジョイスがこの聖人の修行時代と布教時代をとりあげていること、これを場所に還元していること、また、布教のことばの伝播場の移動で伝えていることなどである。いっぽう、St Kevin はヨガ行者として登場し、待ち望まれた救世主になぞらえられ、歓呼して迎えられているが、そのような人物の総称でもある。

このような発展のさせかた、層の重ね方の特徴は、すでに205.16-206.28の註解⁴⁾で油絵あるいは音楽の技法になぞらえられる、と指摘したところであるが、さらに、一瞬先には別物になりうる人間のアイデンティティと物の実体の解釈だとも考えてもよいだろう。また、St Kevin が普通、純潔の聖人ということを肯定的に捉えて取り上げられるのに対して、この見方のみが前面に出るようにはせず、いっぽうにある事象として、女性を拒絶して身投げさせたという逸話を採用して、彼の人間性を問い直していることも、詳細な検討から明らかになった。

註

1) James Joyce, *Finnegans Wake*. London: Faber and Faber, 1975. 本稿の定本は本書とするが、註解の

テキスト部分は、本書に基づいた *Finnegans Web: A Webified Version of James Joyce's Finnegans Wake* (<http://www.trentu.ca/faculty/jjoyce/>) を引用する。

- 2) 下記の文献一覧にある Glasheen の *Third Census of Finnegans Wake* や McHugh の *Annotations to Finnegans Wake* などを見れば、どこにどの聖人が何回登場しているかを概観できる。
- 3) 本稿は、2008年11月-2009年7月、関東ジェイムズ・ジョイス研究会で分担発表し、検討を経たものをもとにしている。
- 4) 福岡眞知子「*Finnegans Wake*, 205.16-206.28 註解」『昭和学院短期大学紀要』31 (1995): 96.

記載方式

まず本文テキストの各行を、四角囲みに入れた行番号(たとえば5行目は $\boxed{5}$)のあと、Helvetica-Boldで引用する。これをラインで以下と区別する。

次に、平易な英語文に書き下す試みを記す。

その下に、テキストのそれぞれの語のほぼ下に、以下のように、文献から語釈を転記し、その文献を略記して示す。

さらに、英語以外の言語にも解される場合はその言語を、略号を付して示し、また、英々訳や日本語訳を、ほぼ各語の下に加えて記載する。

最後に、それぞれの箇所解説・註釈を記述する。

文献と略号

- Bonheim, Helmut. *A Lexicon of the German in Finnegans Wake*. Berkeley: U of California P, 1967. 171-72. …… LG
- Glasheen, Adaline. *Third Census of Finnegans Wake: An Index of the Characters and Their Roles*. Berkeley: U of California P, 1977. …………… TC
- Hayman, David, *A First-Draft Version of Finnegans Wake*. Austin: U of Texas P, 1962. …………… FD
- McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. 3rd ed. Johns Hopkins UP, 2006. 601-02. …………… #
- Matsuda, Tokuichiro, ed. *Kenkyusha's English-Japanese Dictionary for the General Reader*. 2nd ed. Tokyo: Kenkyusha, 1999. …………… R>

O Hehir, Brendan and John M. Dillon. *A Classical Lexicon for Finnegans Wake: A Glossary of the Greek and Latin in the Major Works of Joyce*. Berkeley: U of California P, 1977. 493-95. …………… CL
O Hehir, Brendan. *A Gaelic Lexicon for Finnegans Wake: And Glossary for Joyce's Other Works*. Berkeley: U of California P, 1967. 314-26. …………… Gael.
Wall, Richard. *An Anglo-Irish Dialect Glossary for Joyce's Works*. Gerrards Cross: Colin Smythe, 1986. 115. … AIDG

言語と略号

French …… F German …… G Greek … G / Gk
Irish …… Ir Italian …… It Latin …… L

601.04-36

4 Bring about it to be brought about and it will be,loke,our lake

Bring about it to be brought about, and it will be, look, our lake lamented,

bring about (cause it to happen) 命令文

look, our late lamented

Loke ([loukə] 《北欧神話》ロケ (Loki))

R> Odin の兄弟、不和と悪事をたくらむ火の神 ; Heimdall
と闘い相討ちで死ぬ

Shem/Shاون

lo=ME loke=look (見よ)

FW601 には、owen=river の源流として、(あるいは流れる先として) lake に視点をと呼びかける声がある。歌が響くとともに、英雄、巨人は聖人 Kevin の姿として見せられる。背景は Glendalough となり、それからたたえる歌とともに視線は湾に向かい、数々のダブリンの教会へと進んでいく。Kevin の教えの広がりをたどる。祈りいっぱい、と讃嘆の声も聞こえる。

成し遂げよ、という声で、angel にその名前にと告げられた Kevin (He of Blessed Birth) が現れる。Yogi, priest となったこの人は、洞窟で夜を、Glendalough (Valley of the Two Lakes) の湖のほとりの木のうろで昼を過ごしていた。隠者 Kevin は動物好きの反面、たいへんな人間嫌い。言い寄る麗しき若き Cathleen をふたたび拒絶した。一説には、崖から突き落とされたとも、嘆いて湖に身投げされた (TC) とも言われている。かくして湖は、嘆きの湖、大いなる欠落の場所となっている。Kevin の固さ、celibacy, chastity は、嘆かわしい人間性の一部の欠如でもある。

また湖は、太陽が沈んだあと、司祭たちが舟で渡るところ。昔の国、地下の世界の沈むところ。生と死が移る域。固体と気体の間。

7年の隠棲ののち、彼は人と交わることになった。牝牛が彼の住処にやってきて、彼の衣服をなめ、たくさんの乳を出したため、飼主の Dima があとをたどり、彼に出会い、彼は Dima を改宗させた。それから Dima's family を教化し、おびたしい家族にキリスト教を広めていったという。

O'Tool of Glendalough のガチヨウを若返らせてここに修道院を建てる許可を得て、数ある岩で修道院を建てた。弟子たちも加わり、Round Tower を含めて7つの建物が建ち、ここに7回参ればローマに1回巡礼するのと同じ、と考えられた。

数々の奇跡があったとされている。彼が物乞いたちに4頭のヒツジ (sheep) を与えたはずが、1頭も失われていなかった、とか、若者のでんかん発作を直すのに林檎が必要とわかり、彼が柳に林檎をと命じたら生じて若者が癒された、とか、親友の St.Ciaran of Clonmacnoise の魂が、死後3日してようやくたどりついた彼に再会しにからだにもどってきて、ふたりは語らいあい、終油の秘跡を彼がほどこすと、彼に永遠の統合のしるしとして his silver bell を与えた、などである。

Hymns にある以下の 'Ikos' もテキストに組み込まれているだろう：

Ye lofty trees of Ireland, ever move your verdant branches, that with the rustling of your leaves, as with the strings of a multitude of

harps, ye may make sweet music for the King of kings; for thus of old did ye delight His faithful servant, the venerable Kevin, with your melodious song, easing the severity of his ascetic life with the beauty of your hymnody, filling his soul with exultation, and causing him to cry aloud: Let every breath praise the Lord!

(Cited from orthodoxwiki.org/Kevin_of_Glendalough) (下線部引用者)

5 lemanted, that greyt lack, the citye of Is is issuant (atlanst!), urban

that great lack, the city of Is, is, issuant (at last!), urban

Lac Leman: Lake Geneva # Isis # at last
Ys: legendary city in Brittany engulfed by ocean
a king of Atlantis supposedly buried under Lough Neagh

CL lake lemanted: Lacus Lemanus L: Lake Geneva

CL Is is: Isis: Egyptian goddess; #A

CL atlanst: Atlas: giant changed into a mountain who holds up the sky

CL atlanst: atlantis L: pertaining to Atlas

leman: R> [lɛmən] (《古》恋人)

Leman: F Lac Leman: Lake Geneva, Lake Leman

Leman: R> F [lɛmā] (Gerard-Mathieu Leman (1851-1920) Bergium の将軍; 1914年勇敢に Liege 要塞を守り、負傷して捕虜になった)

Le Mans/ F le man/ the Isle of Man

grey (ねずみ色の; 《シトー会修道士のように》ねずみ色の服を着た)

Grey, Sir George (1799-1882) (アイルランドの暴動を抑え、英国の近代的監獄制度の基礎をつかった); Henry

George Grey (1802-94) (ホイッグ党の指導者、植民地相、イギリスとアイルランドの間に自由貿易を導入)

that great lake, Lake Leman (stuttering)Is/ is/ Is.=Isaiah/ Iseult/ Isolde/ Yseult

lack/ lake/ luck city+ye (thou の pl.; =thou)/ city の発音変化形

issuant (《古》出現する; 《紋》〈獣が〉直立して上半身だけ現した) lant (放尿する)

issue/ issuance (発行)/

F issant ([紋] (動物の) 上半身だけ見える)

Iseult の都市 = Dublin urban: city の

?the Eshert=*I discart*=a hermit's retreat: the Upper Lake の東、川が湖に流れ込むあたりの名前

Iseult の市は Dublin である。また、7つの教会のある Glendalough の Round Tower 周辺はまた、‘the City’とも言われた。市の勃興に注目せよ、と呼びかけている。すなわち、ひとりの行者・修道者・聖人・巨人・HCE が眠り・死・泥酔・隠棲・嫌人から醒めて起き上がる・再生することが、ひとつの都市 = アイルランドのダブリンの勃興・立ち上がりと重ねて表現されている。

6 and orbal, through seep froms umber under wasserres of Erie.

and global, through the seep from umber under the water of the Erie.

‘Urbi et Orbi’: the pope’s address ‘To the City [Rome] & the World’

sleep from slumber # G Wasser: water # Lake Erie, U.S.

Giraldus Cambrensis says that in clear weather fishermen see buildings (round towers) under Lough Neagh

CL urban and orbal: Urbi et Orbi L: to the City and the World: *papal utterance*

Gael. Erie: Éire (éire): Ireland

LG wasseres: Wasser: water

oval/ global/ orb (球体)

seep (しみ出る、漏れる; 徐々に拡散する; しみ出た所、小さな泉)

from umber (アンバー: 二酸化マンガンを含む水酸化鉄、天然の褐色顔料) / umber (カワヒメマス, grayling; シュモクドリ, hammerkop)

Wassermann (ドイツの細菌学者)

Wassermann test (梅毒の反応試験)

res[reis] (物、実体)

eerie (不可解な、不気味な)

水中から滲み出すように立ち上がった都市の勃興。水中にすかして見えてくる都市、地下水脈から滲み出す水から成長した湖、その湖をたよりに生じる街、ダブリンの興りが重ねられている。

St Kevin の道行きは、ダブリンの市中 → Kilnamanagh, Tallaght, Co. Dub. → Wicklow Gap → Hollywood → Glendalough で、布教はこの逆の方向であった。

7 Lough!

Lake!

Gael. Lough: loch (lokh): lake; anglic. lough

Lake/ Look/ Lo (見よ)

次からすると、このせりふは若い洗濯女へのものか?

磔刑のキリストの十字架に掲げられた「この人を見よ」も響いているか。

旅をして、山の頂にたどりつき、眼前に広がった湖に感嘆し、連れに叫んだことばか。

鳥の視点、鳥瞰図、巨人の視点を感じられる。

以下の三様など、多様にとれる。(1) 若い女が行進を見ていて、盲目の老婆に実況中継してやっている。(2) 娘たちを含めた行進を見ている群衆の、口々に叫んだり教えあったりしていることば。(3) 戦時の戦勝または出兵パレード。

8 Hwo! Hwy, dairmaidens? Asthoreths, assay! Earthsigh to is

Who! Why, dear maidens? Ashtoreths, I assay! The sigh on the earth is

G wo: where # We hwy: they, them # s Dermot Asthore

Who? Why? # I dair: oak (.02) dear

Astaroth, Ashtoreth: names of Astarte, Babylonian fertility goddess

AIDG dair ... (A.I.pron.): dear AIDG Asthor ... (Asthore): see FW 197.21 (Sabrine asthore)

Gael. dairmaidens: dair (d ar): oak

Gael. d--: Dairmaid (d'firmid') : Freeman; hero of *Toraidheacht Dhiarmada agus Ghráinne*; *Shem*

Gael. Asthoreths : a stór (astór): my precious (endearment)

LG Hwo: wo: where

LG Asthoreths: Ast: branch

FD Hwo! Hwy!

How+Who How+Why dairy (乳製品製造所) / deary (《口・古》ねえあなた)

asthore(Ir. R>=daring[*sic*]=oh treasure)=darling

Ashtoreth (《旧約》アシュトレト (Astarte))

R>Astarte: アシュタルテ (=Ashtoreth, Ishtar, Mylitta) フェニキアの豊穡・性愛・多産の女神

assay (分析する、検定する、評価する)

I say earth+sigh earth sign (《占星》地の宮)

語っているのは年上の洗濯女、聴いているのは若い洗濯女たちか？「誰だと思う？ねえ、あんたたち」と。

若い女たちの「誰が？」との間に、「おや、あんたたち。アシュトレトさまよ」と年上の洗濯女が答えているのか。Ashtoreth に s がついているところを見ると、娘たちがアシュトレトたち、であるのか。「ねえ、アシュトレトであるあんたたち、喜びなさい」と言っているのか。聖人の地上の街への到来を、水源から染み出してきた川と重ね合わせてたたえるようにあおっているか。

たたえる、というのは宣伝にも通じる。ラジオから聞こえるコマーシャルの声が、反響しているのか。

20代で 'Grace' を書いたジョイスは、酒場であおる声、ラジオの宣伝、宗教的宣伝を重ねても不思議はないだろう。St Laurence O'Toole が幼いころ、Bishop of Kildare から初洗礼を受けるため、また、生地 of Castledermot, County Kildare から Donagh O'Connor, King of Offaly のもとに人質にするために送り届けられる途中、預言者・見者に呼び止められ、where they were going and why, what name are you going to give the boy と尋ねられる。従者たちは Laurence という名前にするように教えられる。これは laurel にちなんでいるとも考えられたが、本人は Laurentius とラテン語化してサインしたし、アイルランドでは Lorcan ua Tuathail として知られていた。(Desmond Forristal, *The Man in the Middle*. Temple-na-Skellig Press, 1988, 2007. 13.)

ここで、早くも St Kevin につぐ Glendalough 関係の聖人にしてダブリンの守護聖人、St Laurence O'Toole の話が聞こえているのかもしれない。

9 heavened.

to be heaved to the heaven.

heaven/ heave (持ち上げる) + ed

あのかたがあらわれたからには、これまでの地上のため息も天にて高められ報われるというもの、ということか。

10 Hillsengals, the daughters of the cliffs, responsen. Longsome

Hill's angels, the daughters of the cliffs, respond to him. On the longsome

Hell's angels # G Engel:angel # G langsam: slow

Macpherson (*The Songs of Selma*) glosses 'mac alla' as meaning 'son of a cliff'

Gael. daughters of the cliffs: ma calla (mokole): "son of a cliff": echo

LG Hillsengals: seng-: singe [*sic*]

LG H--: Engel: angel

gal: girl

response+en(pp.)

longsome (長ったらしい) / long+some/ lonesome

R>Mendelssohn, *Fingal's Cave* はドイツ語題名 *Fingalshohle* 別名 *Die Hebriden* で、初稿では *Die einsame Insel* (孤島)、1832年ロンドン初演時は *The Isles of Fingal* と題された。

Kevin に関係する天使、崖、孤独、植物が組み込まれている。洞窟も。

St. Cronan は彼に洗礼をほどこしているとき、12人の天使が小ろうそくをかかげて立っているのを見たという (*Glendalough and the Seven Churches of St. Kevin*, 1936, 1964, 34)。

子どものころ動物好きだがやんちゃで人間嫌いだった Kevin は、7歳から修道院で読み書きを習い、Lent の40日間手に置いたまま blackbird を巣作りから巣立ちまで見守ってから小屋の flagstone に横たわり、やさしくなる。天使に示された 5 x 7 x 3 ft の洞穴 = St. Kevin's Cave, St. Kevin's Bed に寝起きして、昼間はさらに人から離れた Upper Lake のほとりで

祈り、湖のカワウソに薬草と魚をもらい、hermit生活をした。触れたのち乳の出が豊かになった牛、牛から Kevin に触れた農夫の Dima、その家族、と Kevin の世界は広がっていく。人間的に眠っていた人=Kevin という(宗教的)巨人が目覚めていき、人との交流を広がらせていくことに重なり、それは同時に彼とキリスト教の教え・ことばの広がりにも重なり、the Kings River の川の水が the National Museum in Kildare Street のドアの外の石に刻まれた迷宮が示す経路を逆に流れてダブリン湾に注ぐのに重なるか。

St. Kevin's Cave はもとはキリスト教以前の墓であった (*Glendalough and the Seven Churches of St. Kevin*, 17)。彼がそこに住んだのは、キリスト教以前の宗教に終焉をもたらし、新しい教えを伝え始めたことにつながるという。

また、同書によれば、彼がまっさかさまに投げ飛ばして殺したのは、彼の庇護のもとにあった少年を魔法で害しようとした魔女で、彼はこの魔女を湖のほとりの石に変えた、とも言われているようだ。

このあたりは地理的に Wicklow to Hollywood にあたる。

「山の天使たち、崖の娘たちよ、応じよ」とは、応唱せよ、こだまのごとくたたえて歌え、との呼びかけか。それとも、世俗に下りてきた僧を迎えて、娘たちよ、応じよ、というのか。

The longsome/lonesome Samphire Coast は、植民地への言及。アイルランドの島の小ささにくらべて大きな大陸の長々しい海岸、孤独な植民地の水辺は、Kevin の住処のある孤独な湖のほとりに通じるのか。写真で見ると、Adelaide, Aus. 近郊の Dublin あたりの海岸のようすは、2湖を抱く Glendalough に似ているようだ。ジョイスが当海岸の写真を目にしたとは思えないか。1930年当時、オーストラリアに宣教しに行く司祭、アイルランドからの移民はもちろん、いた。第一次大戦でオーストラリアの参戦に当地のアイルランド人枢機卿とアイルランド系カトリック教徒が巻き込まれていたことが、メルボルンの軍事博物館でわかる(註解者が2008年3月、現地を確認した)。そして、Dublin, Aus. は明らかにアイルランド系の街。'Eveline' で見るように、当地の絵はがきが送られてきたのをジョイスが目にしていただ可能性も高い。

ジョイスの妹のひとり Margaret Alice ('Poppie') Joyce は Eveline のモデルで、シスターになってニュージーランドに行った(山田久美子)。

Margaret Alice ('Poppie') Joyce は母親の亡霊を見たし、修道女になるのを母親との約束で家事を見たあとにした。The James Joyce Centre の 'Significant Joycean Dates' にある彼女の項 (<http://www.jamesjoyce.ie/detail.asp?I...>) にもあるように、Ellmann のあげているモデルと合わせて、Eveline のモデルと言えるだろう。ニュージーランドの the Convent of Sisters of Mercy で Sister Mary Gertrude となって音楽教育に50年以上専念し、1964年3月1日に死去。ジョイスと交わした書簡は焼かれてしまって、ない。

このことば (Longsome the samphire coast) は、Glendalough から急に Dublin Bay, Ireland に視点を転じさせる。と同時に、Kevin の布教の行く先は、ダブリンの街を超えて、遠くアデレード周辺に及んだことが思い起こされるしくみのことばである。宣教と植民地主義がセットで進んでいったさまを想起させる。

ラジオから聞こえる旅の広告か? 植民地への旅のいざないか。

ジョイスが布教、宣教とラジオの宣伝・コマーシャルとをだぶらせて考えたことは、想像にかたくない。

11 the samphire coast. From thee to thee, thou art it thoo, that

samphire coast. From thee to thee, thou art it then, that

samphire: maritime plant; leaves used for pickles

Samphire Island, Tralee Bay # s Tea for Two

Skt tat-tuam-asi: 'that thou art': aphorism identifying Brahma with the individual

Gael. thoo ... thoo: tú (rú): you (thou)

samphire (R>海岸の岩などに生えるせり科多肉の草《葉を酢漬けにする》); glasswort (アッケシソウ) [*F (herbe de) Saint*

Pierre St. Peter('s herb)]

some/ sam /samphire /sapphire sapphire は青玉とも言われる。青色。

thou/ tho, though, those, then/ now thou+you

tete-a-tete/

Musical の *No, No, Nanette* (1925) で歌われた 'Tea for Two' の歌詞 (www.metrolyrics.com ほか多くのサイトから多種の変形が入手できる) のパロディが見られる。Irving Caesar 作詞、Vincent Youmans 作曲。Jimmy と Nanette がふたりで歌う。歌詞は以下の部分を含む：

Picture you upon my knee
 Just tea for two
 And two for tea
 Just me for you
 And you for me alone

Nobody near us to see us or hear us Mm, mm, mm,
 (Nobody near us, to see us or hear us)
 No friends or relations
 On weekend vacations
 We won't have it known, dear,
 That we own a telephone, dear ...

Day will break and I'll wake
 (Day will break and I'm gonna wake)
 And start to bake a sugar cake
 For you to take for all the boys to see
 We will raise a family
 A boy for you, and a girl for me
 Can't you see how happy we will be

本文のこのあたりに主題が歌。

この歌詞は、Irving Caesar が臨時のつもりで Vincent Youmans の性急な要求に応じて出したもので、そのことを彼は、Steve Allen's radio show で明かしているという説もある。「偽作」とか半分眠りながら45分で作り上げたもの、とか言われている。このラジオ番組をジョイスが聴いていたとは思えないが、ラジオから流れる歌をところどころ聞こえるようにはめ込んでいると思われる。

この歌は、よく読むと、植民地主義と St. Kevin の両方につながっている。恋に夢中になった男性が、ぼくのひざにすわってふたりでお茶を飲むことを思い描いてみて、と誘う。彼は、今の住居は不満で、ふたりだけで、喧騒の街を離れ、流れのきれいなところに隠れて暮らそう (=St. Kevin の隠棲)、と言う。Nanette は同意して (=植民地化されて)、友だちも親類も電話も絶って誰も近づけずに暮らしましょう、と応える。目覚めたら砂糖菓子を焼いてあげる、と言い、ふたりは、子どもを育てましょう、と声を合わせる。最初、それぞれにお茶であった夢は、最後は、君には男の子を、ぼくには女の子を、という幻想にまで進展している。

St. Kevin の独身の隠棲は、かくして、男女1組の幸福幻想に変身し、孤独な僧の信者増加の道行きは、子孫をふやしたい男性の幻想・妄想と、小さな島から大きな大陸へと領土を増やし支配を拡大していく植民地主義の欲望と重ね合わせて見せられている。おかしくもこっけいにも、皮肉にもとれる。しかも、孤独で長々しいオーストラリアの海岸は、植民地アイルランドの民に植民地化された場所である。

ラジオから聞こえてきた歌が、その時代の空気や欲望を反映していることに、ジョイスが気づいていなかったはずもない。

つまり、裸のヨガ行者の到来ないし目覚めを、見よ、たたえよ、とにぎやかに語らせる裏か底かいっぽうかで、ごたいそうな巨人のうさんくさを指摘してもいる。醒めながらもおかしく喜劇に加担しているような感じ、とでも言おう。

12 thouest there. The like the near, the liker nearer. O sosay! A

thou art there. The like the near, the liker the nearer. O, so say! A

-est (thou に伴う動・二・単・現・過)

F sosie: counterpart, double

so say/ say so

th の発音・冠詞文法練習帳からとったような th カタログ。つまり、定冠詞のヴァリエーションで、thee/thoo (th+you) /thou/there/the (the の品詞 2 種)。次は、不定冠詞の羅列で、a 4 つ (= 4 賢者?!; 4 集団) の単数形のカタログ。その次は、複数形のカタログ。

似たものが近づく、似ているほど近づく。または、似たのが近くにいると思えば、ますます似てきて、ますます近づいている。汝から汝へとことば・水・教え・人物が伝わり、立ち上がりへと近づいてくる、ともとれる。もうそこにいる。まるでダブルだ。だから言え! と呼びかけているのか。「そうせい」という日本語にも聞こえる。かくなれかし、と。「そうせい」は「双生児」の「双生」かもしれない。だんだん近づいてくる似た者(たち)は、双生の一対、一組の家族、一団、一派、同族の娘たちとも言える、と漸増するように範疇を大きくしていく括りを展開している。つまり、「汝ら」とは、よく似た乙女たちであるようだ。

13 family, a band, a school, a clan girls. Fiftines andbut fortines by

family, a band, a school, a clan girls. Fifteens and /but fourteens by

I Clann na nGaedheal: 'Children of the Irish': U.S. society supporting Fenians

15+14=9+20=8+21=28+1=29

Gael. clanagirls: clan (klon): children of the same family

Gael. c--: Clann na nGaedheal (klon nu nĕl): "Children of the Irish": the I. race

LG clanagirls: kleine: little

Kevin が住んだ場所は今、St. Kevin's Bed と呼ばれているが、five by seven by three foot cave だったと言われている。

Fifteen(/fifty)+s and/but fourteen(/forty)+s by

娘たちの集団は、# の計算によれば29名 = Rainbow Girls。話も成長。乙女たちの形容。

14 novanas andor vantads by octettes ayand decadendecads by a

novenas and/or vantages by octets and decad-and-decades by a

novena # F vingt

CL novanas: nova (fem.) L: new

CL n--: novena (fem.) L: nine each

CL ayand: aiens L: saying yes; assenting; asserting

CL decadendecads: dekas, dekadods G: group of ten

CL d--: [h]endeka G: eleven

CL d--: [h]endekas, [h]endekados: group of eleven

CL d--: *deka[h]endeka G: ten-eleven [intended for 111?]

CL d--: cadens L: falling

R>novena: 《カト》9日間の祈り

vantage:R> 1.《古》利益、有利な立場; 眺望のきく地点 2.《廢》好機

vingt(=20)+add+s R> octet(te):《樂》八重奏(唱); 8人組、8個1組

R> Ayande: [aja:ndei] アヤーンデ《男子名》[Yoruba=we gave praises and he came]

R>decad: 10 ; 10個 1組のもの

R>decade: 10年間 ; 10個・10人からなる 1組 ; ロザリオの 1連 ;
小玉10個と大玉 1個とからなる

decadence decad+en+decad+s decade'n(=and) decad+s

8 + 11 + 10

29づくし。うるう年。月の満ち欠けの 1ヶ月。太陰暦の 1太陰月 = 29日。

7 x 4 + 1 は 29人の乙女たちであり、あるいは、虹の七色（虹娘）を 4つ（4人）に一色（Issy=Iseult）を加えたものと言えるだろう。

洗濯女は、娘たちに、「さあ、おばかで魅惑的で、15人と14人かと思えば8人と10人と11人と集合変化し変幻するお前たちよ、巨人・宣教者 Kevin=HCE=... が立ち上がりつつあるのに応じよ」と煽動・呼びかけているのだろう。

10行目以下は、巨人・聖人・ダブリンのパブの主人・第二次大戦前のパリのアパルトマンの住人（*Conceptual Guide to Finnegans Wake* の解釈を参照）が、町に現れる・眠りから覚めて起床しかかるのを、歓迎・歓呼・賛嘆し崇めたてまつる乙女たち・信者たち・見物人たちが、踊り・歌い・バンドで行進し、などするきらきらした多彩な変化に富んだようすの語り伝え・実況ともとれよう。**15** lunar with last a lone. Whose every has her different from thelunar calendar with a lonely last. Whose every (*throat*) has her different (*voice*) from the

(628.15)

628.15 The keys to. Given! A way a lone a last a loved a long the

last one whose every/ everything/ every throat/ every ...

her different/ herd + different/ different herd (群れ)

太陰暦では29日が1月（ひとつき）。12ヶ月のあとは孤独な最終月。または、うるう年の2月29日は4年に1度の孤独な1日。

類似・相似と差異が並置され、娘たちの変幻と類似、分裂と同化がめまぐるしく描かれる。Issy がまた、29に変化するひとりでもあるのだろう。

あるいは、女嫌いの聖人を誘惑した女（たち）、娘たち、魔女たちを反映しているのか。

娘たちは、数は多いか変化して多く見えるかするが、煎じ詰めればひとりだけ。また、それぞれ違う声や姿であるが、結局、近く、似たようなものである、との見方が提示されていると言える。

Issy が Lucia Joyce をモデルとしているということを考えると、統合失調症で多様性を示す Lucia の姿やダンスのようすを描いているとも見られよう。

基本的には、巨人・聖人・主（あるじ）・目覚め行く男が、乙女たちに口々にたたえられて、ということ。

16 similies with her site. *Sicut campanulae petalliferentes they coroll*similes with her site. *Sicut campanulae petalliferentes they*# *L* *sicut campanulae petalliferentes*: just like petal-bearing little bells# family *Campanulae* includes Canterbury bells

corolla of flower

CL Sicut campanulae petalliferentes: *sicut campanulae petalliferentes* (1) LL; (2) Mod L:1. just like metal-plate-bearing little bells; 2. just like petal-bearing little bells*CL coroll*: corolla L: garland

R>simile: 直喩 / simile: (楽) 同様に R>site: 敷地、遺跡、《生態》《植物の》立地

simile/ similar R>similis *simmili gaudet*: [L=like takes pleasure in like] 似たものは似たものを好む、類は友を呼ぶ

R>corolla: 花冠

R>corol(l): =corollary: 《論・数》系；推論；付随するもの

乙女たちはそれぞれ声は違うが、生地にたとえられ出生地に似たところがあり、結局、似たようなところから来ているから何もかも同じようなもの、ということか。

乙女たちはキャロルを歌うが、また、花にたとえられる。花卉を持つ釣鐘草かホタルブクロ (bellflower) のように、また、小さな鈴をいくつもつけた金属の皿のようなころりんりんというような声で、歌い、舞う。花冠・花輪・鈴をつけ、Trinity College, Dublin の中庭をぐるぐると。あるいは、オーストラリアの Botany Bay をめぐっているかのよう。

17 in caroll round Botany Bay. A dweam of dose innocent dirly

carol round Botany Bay. A dream of those innocent girly

Botany Bay: quadrangle at Trinity College, D

Botany Bay, prison colony, N.S.W., Australia

dream of those

AIDG dose (A.I.pron.): those: see U 38.33-34 'De... hayloft'

R>carol: 祝歌；《詩》鳥のさえずり；歌を伴った中世の円舞；喜び歌う、歌い祝う、クリスマスキャロルを合唱しながら外を歩く

R>dweeb: 《俗》ダサイやつ R>wean: 乳離れさせる；から引き離す

R>deambulation: 歩き回る事、遊歩 R>dose: 《薬の》一服

R>dirly: 《スコ・北イング》〈苦痛・感動が〉…の身にしみる；うずく

dirty/ girly

喜び、祝い、キャロルを合唱しながら外をぐるぐる踊りまわる。

少女たちは、純潔無垢かつ汚れているものとして描かれ、彼女らを／の見る夢は、麻薬の一服による夢にもたとえられる。

オーストラリアへの言及、植民地支配への言及。

TCD は British Empire のエリート教育の場のひとつであり、植民地支配の出先教育機関である。ここをもオーストラリアの Botany Bay をも St Kevin をたたえる者たちが歌い踊って宣教に至るということは、確かに、Dirty Dublin の無邪気な乙女たちの「夢」だったかもしれない。実際に、オーストラリアにアイルランドの宣教師とともにシスターたちは出かけて行き、カトリックをも根付かせていった。St Kevin の教えは伝播していったのであった。

18 diris. Keavn! Keavn! And they all setton voicies about singsing

girls. Kevin! Kevin! And what they all set on voices about singing

girls

Gael. Keavn!: Caoimhghin (kívgin): Comely-birth; st., fndr. of Glendalough; anglic.

Kevin; *Shaun

Gael. K--: Caomhán (kíván): dim. of *caomh* ("comely"); masc. pers. n. anglic. Kevan

FD Keavn! Keavn! And they all setton voicies about Keavn!

St Kevin

cf. Kealakekua Bay: R>1779年に Captain Cook が殺害された Hawaii 島西岸の湾

R>set on: けしかける；…に〈心を〉注ぐ

来たらん、来たらん、エリヤが来たらん、というのと呼応。St Kevin の到来を歓呼し、賛嘆して喜び迎えている民衆の声が記述されている。語り手が、目の前に見ているように伝えている／そのまま、記述。

いっぽう、*Gael.* の指摘にもあるように、Kevin は Rainbow Girls を従えている Shaun でもある。

19 music was Keavn! He. Only he. Ittle he. Ah! The whole

music was Kevin! He. Only he. It'll he. Ah! The whole

Moore: *s* Sing, sing, Music Was Given [The Old Langolee]

little

みなが集中・注目してきたのはケヴィンだ。誰だろう、そのほかの人など考えられない。唯一の彼がやって来たのだ。ほかならぬ彼であろう。あー、と感極まる。話し手、聞き手、沿道の民衆、たたえる乙女たちなど、誰であれみな、感動し、賛嘆の声をあげる。

宗教的熱狂、政治的熱狂、新しい布教的マスコミ・コマーシャルイズムの効果が、重層的にとらえられ、描かれているだろう。

以下はケヴィンの布教の広がりを教会の名前のカタログで示す。Glendalough にいて St Kevin は多くの巡礼者・弟子をここに集めた。こうして栄えた Glendalough が Monastic City と呼ばれたゆえんである。彼自身が、Glendalough, Hollywood, Wicklow Gap, Dublin というように、もと来た道を逆にたどって布教して歩いたばかりではなく、数多くの弟子たちが、ここからいわば世界中に教えを伝えていっている。

20 clangalied. Oh!

sang. Oh!

G Klagelied: lamentation # *I* Clann na nGaedheal (.13)

LG clangalied: Klang: sound, tone

LG c--: Klagelied: lamentation

LG c--: Lied: song

clan/ clangour <R: ガンガンという音をたてる

一族全部がガンガン音をたて、歌い、たたえて叫ぶ。おー、聖ケヴィンがお出ましになった！と。

また、教会の鐘の音がガランガランと反響しあっているともとれる。

ただ、ここには、lamentation も重ね書きされている。覚醒 = 生で、生は死のはじまり、との認識からくる嘆きか。Clan girls の修道院入り (死) への嘆きや St Kevin の死のときの人びとの嘆きや帝国主義植民地支配への嘆きの声もだぶって聞こえるしくみか。

21 S. Wilhelmina's, S. Gardenia's, S. Phibia's, S. Veslandrua's,

St Agatha's, William St N. St Francis Xavier's, Gardiner St. St Peter's, Phibsborough. St Andrew's, Westland Row.

D churches: St Agatha's, William St N. # St Peter's, Phibsborough

St Francis Xavier's, Gardiner St # St Andrew's, Westland Row

CL Phibia's: Phibi G: name for the Egyptian ibis (トキ)

FD S. Wilhelmina's, S. Garda's, S. Phibia's, S. Veslandrua's,

R>Wilhelmina: ウィルヘルミナ《女子名》；

Wilhelmina I (1880-1962): オランダ女王 (1890-1948)

garden + -ia >R: n. *suf* 名詞をつくり「病気の状態」「動植物の属名」「地域、社会」を示す
Gardena, California
R>gardenia: クチナシ

Phebe/ Pheba (R>(= Phibbi) 金曜日生まれの子の誕生日名) / Phoebe (R>(=Artemis, Diana) 月の女神、ポイペー) (Gk=shining) (R>《聖》Cenchrea (ケンクレア) 教会の執事で、パウロから重大な使命を託されてエペソの教会に使いした女性、フィベ; *Rom.* 16:1-2)

R>phobia, -phobia: 病的恐怖、恐怖 (症) (opp. -philia)

vessel/ vestry + land/ and + Andrew +

R>vesico-: 「小囊、膀胱、精囊、水疱、肺胞と…の」[NL *vesicula*]

It vesicula: vesica, bladder

R>andr-: *comb form* 「人間」「男性」「雄蕊 (ずい)」

R>-andra: 「…な雄蕊をもつもの」

以下は、ダブリンの教会の所在地名ないし教会名が羅列されている。その数、*A Reader's Guide to Finnegans Wake*, 311によれば28で、乙女たちの数に対応する。(注)

また、ここでも植民地支配への言及が注目されねばならないだろう。

-aで終わる語にしたがっていると見える。「何々病」としたいのか。宗教的情熱も植民地獲得・支配熱も、ともに、過剰な病的なもの、と言いたいようにとれる。Phibia = -phobia + -philiaに見られるように、1語に(嫌悪症と愛好症という)正反対の語を合成してかばん語を造っている。極端をともに、病的、という概念でくくって合体した1語にしている。

(注) *Third Census* (308) (と Kelleher の指摘)にあるように、定本で数えられる教会数は26。残る2、あるいは3教会は議論の余地あり。*FD*で書きながら定本には出していない S. Cabrine's と S. Meekalean Jane's か、隠れているかと # で指摘されている Clarinda Pk, Dun Laoghaire を入れると、28や29になる。(TC が取り入れている Kelleher の案は、'trema! unloud!! pepet!!!' で29になっている、というもの。)

対応する教会名も、議論の余地があるものもある (S. Misha-La-Valse's :# St Michan's, Church St/ TC St Vincent dePaul's, Marino or St Michael's, Kilmainham)。

22 S. Clarinda's, S. Immeccula's, S. Dolores Delphin's, S. Perlan—

Discalced Carmelites, Clarendon St. Immaculate Heart of Mary Church, City Quay. Our Lady of Dolours, Dolphin's Barn. St Joseph's, Portland Row.

Discalced Carmelites, Clarendon St # Our Lady of Dolours, Dolphin's Barn

(Clarinda Pk, Dun Laoghaire) # Immaculate Heart of Mary Church, City Quay

St Joseph's, Portland Row

FD S. Clarinda's, S. Immeccula's, S. Cabrine's, S. Josetta's,

Clarinda (女子名) Clara, Clare, Clarice, Clair, Claire, Clarissa [L=bright]

R>immaculate: 汚点のない、清浄な、純潔な、無垢の

R>mec- (mi:k) : 「長さ」「長い」 R>-cule, -cular: 「小…」

R>Dolores: 女子名; 愛称 Lola, Loleta, Lolita [Sp<L=sorrows (of the Virgin Mary)]

R>del: [*delta*] R>Delphi: Apollo 神殿があったデルポイ dolphin

? the Dolphin Hotel, Southampton

*FD*にある S. Cabrine は定本から落ちている。(FD のは、アメリカの移民の母、St. Frances Xavier Cabrini (1850-1917) をふまえているか?) Dolphin's Barn (= the parcel)

教会の名前や所在地のカタログに付随して、girls に付与される紋切型の形容、属性、名前が散りばめられている。Wilhelmina, Phebe, Clarinda, Dolores, Edda, Rhoda, Una, Alicia, Misha, Christy, Bella, Hedda, Ida, Ellis。使い、恐怖症、清浄無垢 (immaculate)、悲しみ、flowery, rose, clothing, pretty, ring, Mary, ice, snowy, そして abbess という具合。最後に28行目で *ills to elles* とフランス語の「彼女たち」でしめくくっている。

23 throa's, S. Errands Gay's, S. Eddaminiva's, S. Rhodamena's, S.

St Paul's, Arran Quay. Adam & Eve's. Our Lady of Refuge, Rathmines.

St Paul's, Arran Quay # Adam & Eve's (St Francis of Assisi)

Our Lady of Refuge, Rathmines

CL Rhodamena's: Rhodamênê G: Rosy-moon

FD S. Paula's, S. Meekalean Jane's, S. Eddaminiva's, S. Rhodamena's, S. Ruadagara's,

R>per-: 「すっかり」「あまねく」「きわめて」 per (…につき)

R>Anthea: (女子名)[Gk=flowery] anti-, ant-, anth-: 「反…」/anth-, antho-: flowery

throat errand+s, errand boy, errand girl, gay, guy

Paul, Pola, Pula Paul and John Gay (1685-1732) (*The Beggar's Opera* (1728))

Edda (Iceland's) Edda (feminine name) Hedda (→Hedda Gabler [Ibsen])

R>miniver: 《中世の貴族が服飾用として用いた白い毛皮》[OF=small VAIR]

R>Rhoda (fem. name): [Gk=rose] rhod- + dame *It mena: intrigue*

Rhodesia

FD にある S. Meekalean Jane's は定本からは落ちている。替わりにか、St Paul's, Arran Quay が定本では S. Perlanthroa's, S. Errands Gay's と分割されて出ている。Paula は Pula のイタリア語名が Pola (ジョイスがノラと最初に落ち着いて暮らした町) であることを思い起こさせる。

Meekalean Jane は meek and lean Jane。

Adam and Eve's, Merchants Quay は Penal Laws times に (1618-) secret church だった。Rosemary Lane にあり、入口になっている public house 名を使ってカムフラージュしていた。

24 Ruadagara's, S. Drimicumtra's, S. Una Vestity's, S. Mintargisia's,

Church of the 3 Patrons, Rathgar. Corpus Christi, Drumcondra. St Kevin's Chapel, Cath. Univ. Ch., St Stephen's Green. St Paul's College, Mt Argus.

Church of the 3 Patrons, Rathgar

St Kevin's Chapel, Cath. University Ch., St Stephen's Green

Corpus Christi, Drumcondra # *It vestiti: clothes* # St Paul's College, Mt Argus

CL Una: una (*fem.*) L: one

CL Una: una (*adv.*) L: in one and the same place

CL Vestity's: vestitus L: clothing, apparel, dress

Gael. Ruadagara's: ruadh (rúe): red

Gael. R---: Ráth Garbh (rá gorev) : Rough Fort; S. Dublin district, anglic. Rathgar

Gael. Drimicumtra's: Drom Conaire (*d*rum *kunire*) : *Conaire*'s ("high-care") Ridge; N.

Dublin district, anglic. Drumcondra

Gael. Una: Úna (úne): Famine; fem. Pers. n.

Our Lady, Seat of Wisdom (=Newman's Catholic University Church), St Stephen's Green

The Unitarian Church, St Stephen's Green

Corpus Christi: =Body of Christ

R>Argus: 《ギ神》アルゴス《100の眼を持つ巨人》;
厳格な見張人

red girls gala: [gɛɪlə, gæɪ-; ga: -] お祭り (の) drum

Ruanda: Rwanda の旧称; ルアンダ族、ルアンダ語

ruana: [rua:n] ルアナ [コロンビアやペルーの、ポンチョに似た外衣]

dream(s) come true Zarathust(h)tra Nietzsche (1844-1900), *Also sprach Zarathustra* (1883-85)
R>=Zoroaster (c.628-C.551)

dreamy + contra R>Una: ウーナ、ユーナ《女子名》[L=one; cf. Spenser, *Faerie Queene*, Book 1]
《ただ一つなるもの、すなわち真の信仰を象徴する婦人; Red Cross
Knight ('the Anglican Church') と離ればなれになるが、最後は結ばれる》
vest mint Mentor, mentor

25 S. Misha-La-Valse's, S. Churstry's, S. Clouonaskieym's, S. Bella-

St Michan's. St Mary of the Angels, Church St. Milltown Park Chapel, Clonskeagh. Church of the Visitation, Fairview.

St Michan's (known for its vaults)

St Mary of the Angels, Church St

Milltown Park Chapel, Clonskeagh

It bella vista: fair view

Church of the Visitation, Fairview

CL Bellavistura's: bella (*pl.*) L: wars

CL Bellavistura's: bella (*fem.*) L: pretty; #B

AIDG Misha... (Musha): see D 122.18

Gael. Misha-La-Valse's: mise (mishi): I, me (emphatic)

Gael. Clouonaskieym's: Cluain Sceiche (klún shkehi): Meadow of a
Thorn-bush; S. Dublin district, anglic. Clonskeagh

TC S. Misha-La-Valse's = St Vincent de Paul's, Marino or St Michael's (q.v.), Kilmainham

St Michan's, Church of Ireland (St Michan's Church, Church St)

Mysia: ミュシア《古代小アジア北西部 Propontis に臨む地域にあった国》

Michelle/ Michael ?Michels, Robert (1876 - 1936) : 'iron law of oligarchy' Michelangelo

la: 《楽》ラ R>la: 《古・方》見よ、おや R>valse: waltz

G Michaeli(s): ミカエル祭日《9月29日》 G Mis, Misses: 嬢 It la: the; it, her

?Mishan: 密山《中国黒竜江省東南部の県》 R>musha: Ir えっ、おや、まあ (if/ is/ it)

R>mishmash: 《口》ごたまぜ、めちゃくちゃ

Church Street's/ Christine, Christy/ Edwin P. Christy(1815-62)/ Christy Minstrels/ ?Christy
Girl (カクテル)

R>Christy Mahon 《J.J.Syngé の *The Playboy of the Western World* の主人公の若者》

Bella (Arabel(la), Isabel(la))/ ?Bella (Jean
Giraudoux, 1926)

音楽が Gay, drum, minstrel, la, valse (waltz), ring, sing, sound などの語から (意味的に) 聞こえている。乙女たち (／うるわしい宣教のこぼ・教え) が鈴や太鼓を鳴らし、ワルツを奏で踊り、歌い、はなやいで聖人 (／巨人／救世主／宿屋兼パブの主人／…) の到来 (目覚め／再生) をふれて (／祝って) まわって (踊りながら行進し／伝わって) いくようすが記述されている。

26 vistura's, S. Santamonta's, S. Ringsingsund's, S. Heddadin

Star of the Sea, Sandymount. St Patrick's, Ringsend. St Mary's, Haddington Rd.

Star of the Sea, Sandymount # St Patrick's, Ringsend # St Mary's, Haddington Rd

LG Ringsingsund's: rings: around

LG R--: Sund: sound (water)

Gael. Ringsingsund's: Rinn [Uí bhFaoláin] (riñ [í véláin]): Promontory [of a des. of Little-Wolf]; at Liffey-mouth; *anglic.* Ringsend

FD S. Bellavistura's, S. Santamonta's, S. Ringsingsund's, S. Heddadin Drade's,

R>Vistula Lagoon, the 《バルト海南西岸沿いで Gdansk と Kaliningrad の間にある潟湖》

vestural R>vesture: 《古・文》衣服、衣類

Santa: 《イタリア・スペイン・ポルトガルで》女聖人；《口》Santa Claus; 聖… (saint, holy)

Santa Monica, California (R>英国系人が多く、パブや fish-and-chip shop がある)

?Pedro Santana (1801-64), Santo Domingo

?Montagnais (カナダ東部の先住民)

ring+sing+sung+sound Hedda: [fem.name][Gmc=strife]

Hedda Gabler/

Ibsen, *Hedda Gabler* (1890)

heading Aladdin

27 Drade's, S. Glacianivia's, S. Waidafriira's, S. Thomassabbess's

Our Lady of Dolours, Glasnevin. White Friars, Aungier St. Abbey of St Thomas a Becket, Thomas St.

Our Lady of Dolours, Glasnevin # White Friars (Carmelite Priory, Aungier St)

Abbey of St Thomas a Becket, Thomas St

TC Augustinian Friary Church, corner of Thomas and John (q.q.v.)

Streets (see Becket)

CL Glacianivia's: glacies; glacia- L: ice; ice-

CL G---: nivea (*fem.*) L: snowy

CL G---: glacianivea (*fem.*) L: ice-snowy

LG Waidafriira's: waid: blue dye

LG W--: friere: freeze

Gael. Glacianivia's: Glas Naoidhean (glos nín): *Naoidhe*'s (masc. pers. n.) Stream; N. Dublin district; *anglic.* Glasnevin

FD S. Glacianivia's, S. Waidafriira's, S. Thomassabbess's,

Church of Our Lady of Mount Carmel (Whitefriars Street) (入口は Aungier St)

F *glace*: ice cream glacial

wide wide Africa eyed

Thomas/ Thomasa (fem.form of Thomas)

abbess (2つの意味あり)

28 and (trema! unloud!! pepet!!!) S. Loellisotoelles!

And (trembles! unloud!! pepet!!!) St Laurence O'Toole's, Seville Pl.

G Umlaut (母音変異) # Swift: 'Ppt' # St Laurence O'Toole's, Seville Pl.

It tremas: it trembles

LG unloud: unlaut-: impure

LG u--: Umlaut: vowel modification

Gael. Loellisotoelles: Lorcán Ó Tuathail (lurkán ó túhil): Lorcán (dim. of *lorc*, "fierce") des. of *Tuathal* ("people-mighty"); abp. & patron st. of Dublin; anglic.

Laurence O Toole

FD and S. Lollisotolles.

R>-trema: 「穴」「開口部」「隙間」の意 [NL (Gk *trema* hole)]

It *tremare*: tremble un+loud / unloved unloud (x)→=soft (○)

petit/ ppt/ poppy/ peppy/ pretty/

It *pepe*: pepper F *pepee*, *poupee*: doll 《児童語》お人形さん

F *pepere* 《卑語》おとうちゃん/*pepin* 《卑語》種

そして、と言うところで、地震雷が起きるじゃないか、地鳴りがして震えてるぞ、大きな声出すな、おまえ、と、聞き手の中に静めようとする声が入る。カッコ書きしているのは、語り手にかぶさるように声がさしはさまれる、という劇の脚本の書き方にみえる。

交際していた女性に大きな声では言うな、といっている（らしき、つまり、実際には疑問だが）スウィフトに重ねてあり、おかしみが感じられる。あるいは、音楽の演奏上・歌唱上の指示にもとれる。

教会カタログの最後がダブリンの守護聖人、St Laurence O'Toole の教会にしてあるのは、意味深いだろう。(Cf. Desmond Forristal, *The Man in the Middle: St Laurence O'Toole Patron Saint of Dublin*. Temple-na-Skellig P, 1988, 2007.)

29 Prayfulness! Prayfulness!

Prayfulness! Prayfulness!

pray for us

pray/ play/ +ful+ness

祈りと遊びに満ちて、楽しや楽し！と感激し喜んでいるようす。

まぎらわしいとも両義的とも言えるが、豊饒、包摂性を持つと言える。下の方で反応すると、「楽しさがいっぱい」「祈りいっぱい」になる。読み手次第で「皮肉」にも「喜び」にもなり、このFWの「開かれている」性質が自己言及的にここで鮮明に見えるところである。

30 Euh! Thaet is seu whaet shaell one naeme it!

Hue! That is so that what shall one name it!

St Laurence O'Toole buried at Eu, Normandy

F midinettes: work-girls

Port seu: yours # so what

CL Euh!: eu G: well; good, fine CL Euh!: heu L: alas! ah!

LG naeme: nehme: take

R>hue: 色合い；叫び声 R>thae:«Sc.»=those, these

R>Eu: ウー《フランス北部 Seine-Maritime 県の町；ローマ時代の河川貿易港を起源とし、Normandy 公領などに属したのち、王家 Artois 公爵領となる；Eu の城は百年戦争時 Edward 4 世の手に渡ることを恐れた Louis11世によって焼き払われ、16 - 17世紀に再建》

sew/ wheat/ shell

「ああ！それをなんと名づけたらよいでしょう。名づけようありません」と感極まっている。

31 The meidinogues have tingued together. Ascend out of

The young maidens have tinged together. Ascend out of

maiden # G meiden: avoid

Isa 60 : 1 : 'Arise, shine'

I og: young

LG meidinogues: meiden: avoid

Gael. meidinogues: maighdin (meid'in): virgin

Gael. m---: óg (óg): young Gael. m---: ógh (óg) maiden, virgin

FD The meidinogues have tongue togethering. Ascend out of

R>ting: チーン [チリン] と鳴らす R>tinge: 色合い；うっすらと染める

R>tongue

together+ring/ing

乙女たちがみなともにチーンと鐘をならしたりタンギングで楽器を奏でている。だから、寢床を出て起き上がり、ケヴィンなる HCE よ！と促している。ケヴィンになぞらえているので、聖ケヴィンがいたうろの形のたて坑（いわば聖堂）、それがあつた Kevin's Bed、その近くの Kevin's Kitchen と連想される。

女の子たちがみんなでくすぐりあっていた、とも解釈可能か。

いっぽう、パリのアパートマンで目覚めようとしている男に関しても、起きて、と声がかかっているか、心の中で自分に起床をと促している。もう陽が輝いていて、妻のキャサリンが台所において、ラジオの声も窓の外の声も妻の声も（そして自分の内からの声も）、起きてよ、と呼びかけている雰囲気・情景が描かれてもいる。

32 your bed, cavern of a trunk, and shrine! Kathlins is kitchin.

your bed, cavern of a trunk, and shrine! Kathleen is in the kitchen.

St Kevin supposed to have slept in hollow of tree in Glendalough

St Kevin's bed (hollow in rock), Glendalough # Cathleen, rejected by St Kevin

St Kevin's Kitchen: church, Glendalough

CL Kathlins: kathairo G: to cleanse

Gael. Kathlins: Caitlín (kat'lín): fem. Pers. n. from Gk. Katherine

Gael. K---: Ga-linn (golin)[?]: Sea-ray; Cathlin, n. of a star in Macpherson's *Temora*, explained as "beam of the wave"; Cathlin is fem. pers. n. in Macpherson's *Cathlin of Clutha*; one or other is supposed n. of girl who pursued St. Kevin to a lakeside cave, whence he pushed her to death in the lake; "Kevin's Kitchen" is popular n. of chapel at Glendalough

FD your bed and shrine!

R>trunk: 樹幹；《海》たて坑；《廢》筒、管、パイプ

and shrine/ shine Kathleen/ Katherine, Kate, Kitty
Kathlin's bed is a kitchen. kit+chin/ kitchen

聖ケヴィンが拒み死なせてしまった女性と台所に立つ妻が重ねてあるのは、皮肉かホラーか。ケヴィンはうろに寝て、キャサリンは台所に寝ている、と異床を明示しているのか。

ケヴィンが復活する男の象徴なら、キャサリンもまた、何度も老婆の姿になって死んで復活して現れるアイルランドの女性化象徴であった。そういう意味で、またもやジョイスのフェアな意識が読み取れるだろう。

33 Soros cast, ma brone! You must exterra acquarete to interirrigate

Sorrows are cast, my bronco! You must be extra rate of aqua to inter irrigate

I mo bhron: my sorrow

L ex terra: from land

L interirrigo: I conduct water along

CL Soros: soror L: sister

CL ma brone: bavros MG; mauros G: dark, blind

CL exterra: ex tera L: out of land, from land

CL e---: extra L: outside

CL acquarete: aqua L: water CL a---: aquate L (adv.): by the use of water, with water

CL interirrigate: interirrigo L: to conduct water among

AIDG ma brone (mavrone): see U 199.37

Gael. ma brone!: mo bhrón (muvrón): my sorrow!

FD Cast soros aside! You must be extera acquarete to inter irrigate

R>sororate: ソロレート 《亡くなった、または、不妊の妻の妹と再婚する慣習》

R>sororicide: 姉 [妹] 殺し; 姉 [妹] を殺す人

R>sorosis: 婦人 (社交) クラブ

R>ma: pron. 《非標準・方》= my, me. R>bronco: ブロンコ 《全く [ほとんど] ならされていない放牧野馬; 北米西部平原産》

Sorrows are casted. / Cast sorrows. / Solo's cast. / Cast her (your?) sister. / Your sisters are (were) casted.

R>exterior: 外の、外界の、無関係な R>extra: 余分の、特別の; 《俗》《ラジオ・テレビの》ニュース速報 [特報]、臨時ニュース

R>aqua alta: 高潮 R>interrogate: 質問する、尋問する

R>aqua: 《薬》《揮発性物質などの》水溶液[L=water]

R>inter: 埋葬する R>inter-: 「中」「間」「相互」「以内」

R>irrigate: 〈土地〉に水を注ぐ [引く]、灌漑する; 潤す

acquaint/ aqua+rate inter+irrigate

ケヴィンの教えがダブリンの街に伝播し、「悲しみは投げ捨てられ」・みな喜べ、という声が出て、(HCEが再来・再生・起床し、) その話・教えが伝播し、さらに話・喜びは「陸地を越えて」地の外へと伝わっていく。海へと進み、「多島海」の群島にまで及び、「相互に潤す」。アイルランド製のキリスト教の教え、ケヴィンの教えがさらに海外へと伝播したことをたどっている。

ラジオのニュース速報にも重ねられる。

これは、政治的・経済的な植民地化とは異なり、「話」の伝播で、多島海の島々の間にも伝わって、伝える者と聞く者の双方を「潤す」ことになった、と言っているのか?

いまひとつの問題は、捨てられたキャサリンのことである。ケヴィンの聖所から拒否されて投げ捨てられたキャサリンは、「悲しみ」で、そんな悲しみは投げ捨てておけ、と言っているようだ。Bronco, pogueなどに俗語から、ホモセクシ

ユアルの青二才という語意が見えて、ケヴィンの純潔（主義）に対してまた、うさんくささを感じ取ってやゆしている
ととれる。

キリスト教の布教には、「シスター」も大きな役割を果たした。投げ捨ててなどいられなかった。そのことも思い出さ
せるやゆととれる。

34 all the arkytelicans. The austrologer Wallaby by Tolan, who

all the arctic pelicans. The Australian astrologer Whalley by Toland, who

archipelagos

Dr John Whalley, Australian astrologer, fled from D to England

wallaby (Australian)

Toland, deist, fled from D to England

CL arkytelicans: arcus L: bow, arch; rainbow

CL a---: archipelagos G: chief-sea: the Aegean (エーゲ海)

CL austrologer: austrologos L +G: expert on the south

Gael. Tolan: Ó Tuathaláin (ó túheláin): des. of *Tuathalán*
(dim. of *Tuathal*, "people-mighty")

FD all the arkytelicans.

?R>Arky: 《米俗》«Arkansas 州出身の》渡り労働者

R>archi-, arch-: 「主たる」「第一の」；「原始的」「起源の」「原…」

archi+pelican+s R>arctic: 北極の；ひややかな

R>Austro-: *comb form* [Austria] / 「南 (の)」の意

R>John Toland: (1670-1722) 《アイルランドの自由思想家・理神論者；聖書の合理主義的解釈を説き、奇跡を象徴としてのみ解釈したため、*Christianity not Mysterious*(1696)や *Life of Milton*(1698)などの著作は、アイルランド議会や正統派の宗教家から激しく非難された》

TC Whalley, Dr John (b.1653)→Jonah: Reluctant to preach to his fellow
Jews, he was three days in a whale's belly; with John Whalley.

wall a by by to land/ call bye-bye to land

極地のペンギンならぬひややかな「ペリカン」みなを潤す、というのも、多重にとれる。ペリカンの意味から、皮肉な女性を満足させる、という解釈もあるが、孤独な渡り鳥たる移民たちみなを潤す、などにとれる。

ペリカンとともに、くじらも見られる。

ケヴィンの教えがエーゲ海、極地、オーストラリアへと伝わっていることが描かれている。

ダブリンで非難を受けてイングランドに去った占星術師のウェイリーとトーランドのように、ケヴィンのマゴマゴ弟子たちの中には、アイルランドの岸辺をあとにして、オーストラリアに去ってワラビーのようになったのもいれば、クジラの腹にこもったヨナのようなのもいれば、ニュージーランドからさらに別のランドに向かったのもいた、ということだろう。

35 farshook our showrs from Newer Aland, has signed the you and

forsook our shores from Newer Aland, has signed the second person and

forsook our shores # (A is next after Z) # New Zealand

R>forsake: 《文》〈場所を〉去る

far+shook/ forsook shores/ showrs newer A+land

ニュージーランドから、さらに新しいランド、ビスマルク諸島のニュー・アイルランドまで行った。‘You and the Night and the Music’ (1934) (*Revenge with Music* (1934)) ならぬ ‘The You and the Now Our Mandate’ という曲の契約書のようなものにサインしてある、つまり、「相手方」はだれだれ、「今とはいついつ」などと書いた紙にサインしてあって、行って教皇の管轄地とした、ということか。

36 the now our mandate. Milenesia waits. Be smark.

the time in our mandate. Melanesia waits. Be smart.

Bismarck Archipelago, Melanesia, includes New Ireland

CL Milenesia: mille L: thousand CL M---: nesoi (pl.) G: islands

CL M---: mille L nesoi G: a thousand islands

CL M---: Millenesia L +G: Land of a thousand islands

Gael. Milenesia: Míle (míli): n. of leader of Celtic colonists

FD Milenesia waits. Be smark!

R>mandate: 《職権による正式の》命令(書)、指令、勅令；《特に聖職叙任(権)の》ローマ教皇の命令；信任、委託

R>smack: 味がある／ピシヤリと打つ、パクパクさせる

mile + -nesia

smart

Melanesia (Bismarck IIs, Solomon IIs, Vanuatu, New Caledonia, Fiji, etc.)

宣教の進行が、宣教師への扇動、激励のことばに重なっている。新たな植民地、ラネシアが待っているぞ、口をパクパクさせてびしっと宣教してきなさい、と励まし命じている。

起床しかけているパリの男、あるいは、起きかけようという巨人・酒場の主人に、新しい場所、新しい1日が待っているぞ、さあ、ピシッとしろ、と(自分がかラジオの声から受けた感じがかまわりの人がか) 声かけしているともとれる。

602.01-08

1 One seekings. Not the lithe slender, not the broad roundish

One seeking. Not the lithe slender, not the broad roundish

second # vowels in Irish divided into broad (leathan) & slender (caol)

<http://www.robotwisdom.com/jaj/fwake/short 17.html> (The online shorter Finnegans Wake, IV, ch 17) (This is reminiscent of Bloom and Virag pondering Bella's whores!??)[Circe]

R>lithe: しなやかな

R>slender: a. ほっそりした

R>roundish: 丸みをおびた

R>broad: 開口音の

R>round: 唇をまるくして発音する、円唇の

seeking

l 音、r 音、not the、f 音、-ed、the、in-、p 音、fl 音、h 音、feature などがくりかえされ、ことば遊びが展開されている。

「ここでひとつなぞなぞです。検索してください」というような呼びかけ。

宣教師たちの求道、信者の掘り起こし、宣教活動と、こどものなぞなぞ遊びや教育上の問答がだぶっているか。

あるいは、ラジオから流れるクイズにも聞こえる。

あるいは、キャサリン=ALP の容姿をここでひとつ探ってみましょう。と言っているようでもある。しかし、実は Kevin/HCE (*Skeleton Key*) の容姿にさぐりを入れたもの。

問は答えでもあり、「しなやかでほっそりしているものではありません、幅が広い丸みをおびたものではありません、しなやかでほっそりしているものに近い幅広で丸みをおびたものではなく、幅広で丸みをおびたものの風下に対してまずまずのサイズのふっくらした顔つきのものではなくて、まことにまた困ったときには、カールしている、完璧な分割のなされている、花をそばかすのように散りばめた、格好良く濃い赤みをおびた、上品な顔立ちが、まずまずのサイズのふっくらした顔つきのものの風上の方へ揺れているのです。それはどんなでしょう」、あるいは、どの人でしょう、となっている。

女性の姿・容姿に、アイルランド語の特徴、植民地問題が「風」=ことば・教への伝播を鍵としてからませている。しかし、求めているのは男性。ホモセクシュアル性・androgynous 性明確。

地理的には、オーストラリア、ニュージーランドを越えて、西インド諸島に進んでいるから、地球を1周しかけていることになる。循環。そのようにケヴィンの教え、アイルランドの宣教師たちの活動が展開・広まっていった、ということをとどめている。

2 near the lithe slender, not the fairsized fullfeatured to the leeward

near the lithe slender, not the fair-sized full-featured to the leeward

Leeward Islands, Polynesia 《西インド諸島の誤りだろう》

R>leeward: 風下の；風下（側）

R>Leeward Islands, the: リーワード諸島 《1》西インド諸島の小アンティル諸島北部の島群；北は Virgin 諸島から南は Dominica 島まで 《2》リーワード諸島の Antigua, St. Kitts-Nevis, Montserrat を含む英領西インド諸島の旧植民地

R>fair: まずまずの、並みの、明瞭な、読みやすい、なめらかな、でこぼこのない

Cf. R>full-figured: 〈特に女性が〉ボリュームのあるからだつきの、豊満な、太った

R>full: 〈顔・からだつきが〉ふっくらした

R>featured: 特色とした、呼び物の〈女優・読み物〉；…の顔つきをした；《廢》形の整った、容姿の魅力的な

3 of the broad roundish but, indeed and inneed, the curling, perfect-

of the broad roundish, but, indeed and in need, the curling, perfect-

R>in need: 困ったときの、困窮して be in need of ...: …を必要とする

R>curl: カールする；〈唇が〉ゆがむ

indeed と inneed、perfect-portioned、flowerfleckled、highhued、fair-sized fullfeatured などは、いずれも、ことば遊び。頭韻。

4 **portioned, flowerfleckled, shapely highhued, delicate features**

portioned, flower-freckled, shapely high-hued, delicate features

Grania on seeing Diarmaid: 'Who is that freckled, sweet-worded man?'

LG flowerfleckled: werf-: throw

LG f--: Fleck: spot

LG f--: leck-: lick

R>portion: 分割する、分配する

R>fleck: 斑点、そばかす R>freckled: そばかすのある、斑点のある

R>shapely: 格好のよい、〈特に女性が〉姿のよい、均せいのとれた

R>high: 極端な；高度な；〈色が〉濃い、赤い、盛りの hues: 色のついた

perfect+portioned flower+fleck/freckle+ed=freckled with flowers

5 **swaying to the windward of the fairsized fullfeatured.**

swaying to the windward of the fair-sized full-featured.

Windward Islands, Polynesia 《これも西インド諸島の間違いだろう》

R>sway: ゆれる、傾く R>windward: 風上 (側)

R>the Windward Islands: ウィンドワード諸島 《1》西インド諸島 Lesser Antilles 南部の火山諸島 2) 西インド諸島東部 Leeward 諸島の Dominica 島と Windward 諸島の島々とで構成されていた旧英国植民地》

cf. 602.02 not the fairsized fullfeatured

6 **Was that in the air about when something is to be said for it or**

Was that in the air about when something is to be said for it or

that は (1) これまで述べてきたこと、朝の情景のなか、起き上がる男、巨人、歓喜をもってその再生・誕生・目覚め・宗教的覚醒・伝道の開始が迎えられる聖人。また、そのうわさ・情報・伝道のことば。さらに、植民地化の波、宣教、プロパガンダ等々。(2) そういうこと=再生・覚醒とそのうわさ・情報。

「そういうことに関して、何かと言われることになっている時はいつか、について、うわさで・気配で過去にあったのか？」という意味。

it=it (601.05) 「この人を見よ」のこの人=今は Kevin と見える HCE/ Shaun。

ラジオが描かれてもいる。

7 **is it someone imparticular who will somewherise for the whole**

is it someone in particular who will somewhere rise for the whole

in particular

summarize

「それとも、あれは、だれか特定の・非特定の人、全体にとってよいように、どこかで立ち上がるような誰かなのか、ともかくも？」と、まだ寝ぼけまなこのような問が発せられている。

人間がくりかえしてきたこととして、メシアの到来を待つ雰囲気描かれている。

8 anyhow?

anyhow?

引用参考文献 (「文献と略号」に掲げた基本的文献以外を列举)

Begnal, Michael H., and Fritz Senn, *A Conceptual Guide to Finnegans Wake*. Pennsylvania State UP, 1974.

Campbell, Joseph and Henry Morton Robinson, *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. NY: Harcourt, Brace, 1944.

Desmond Forristal, *The Man in the Middle: St Laurence O'Toole Patron Saint of Dublin*. Temple-na-Skellig P, 1988, 2007.

Lacey, Brian, *Pocket History of Irish Saints*. Dublin: The O'Brien P, 2007.

Liston, Bríd, *Sacred Places and Pilgrimage in the Archdiocese of Dublin*. Dublin: Veritas, 2000.

Noonan, P. J., *Glendalough and the Seven Churches of St. Kevin*. Wexford: Newspapers, 1936, 1964.

Rogers, Michael, and Marcus Losack, *Glendalough: A Celtic Pilgrimage*. Blackrock: The Columba P, 1996, 2005.

Schroedel, Jenny, *The Blackbird's Nest: Saint Kevin of Ireland*. Crestwood: St Vladimir's Seminary P, 2004.

Tindall, William York, *A Reader's Guide to Finnegans Wake*. Syracuse UP, 1996.

Veritas Publications, *A Walking Tour of Dublin Churches*. Dublin: Veritas, 1988.

Glendalough and the Seven Churches of St. Kevin, 1936, 1964.

orthodoxwiki.org/Kevin_of_Glendalough

<http://www.jamesjoyce.ie/detail.asp?I...>

www.metrolyrics.com